「遍路を歩く」に取り組んで

内　田　九州男

Report: Walking the Shikoku Pilgrimage Route

Kusuo UCHIDA

授業は「歩き遍路」を受講生が体験・体感することを最大の目標にして開始した。歩き遍路の実践は佐伯修一（保健管理センター），遍路に関する予備知識を得る教室での授業は内田，と担当を分担して始めた。また歩くことそのものは，忠政啓文氏（競歩選手・健康運動指導士）の「ウォーキング」に関する授業二コマで指導を受け，講義では吉田正広氏（法文学部）の「イギリスのカンタベリー巡礼」一コマ追加して受講生の視野を世界にも広げようとした。受講生は８名。

１．授業の概要

１回目　ガイダンス　　内田・佐伯
２回目　ウォーキング実習Ⅰ　忠政・佐伯
３回目　ウォーキング実習Ⅱ　忠政・佐伯
４回目　「巡礼の作法」　　内田
５回目　「遍路の図像学」　　内田
６回目　「遍路の歴史」　　内田
☆５月28・29日　さつき遍路　佐伯(内田も参加)
７回目　「イギリスのカンタベリー巡礼」　吉田
８回目　「人はなぜ遍路に出るのか」(内田)，及び打ち合わせ
９回目　夏期遍路の打ち合わせ
☆８月20・21日　夏期遍路　佐伯（内田も参加）
（この体験遍路には，法文学部の日本史専攻の３回生・４回生・院生５名が応援参加し，かつ卒業生１名がマイカーを出して支援体制を組んでくれた。）

２．『遍路を歩く』実習を終えて

保健管理センター　佐伯　修一

お遍路歩き実習の担当を依頼された当初は当惑した。私自身は“歩き”そのものへの関心は高いが“お遍路”に関しては全く興味が持てなかった。そもそも巡礼の意味が空海の時代とは異なるし，遍路道を取り巻く環境も全く異なっている。大型車が行き交う道を半ば観光地化された札所を訪れることにどれだけの意義があるのだろう。どうせ時間を使うのなら忘れかけられつつある四国山中の古道を巡った方が余程意義深いものがあるのではないか…と思ったのである。しかし，この危惧は実際に歩いてみて初めて半ば解消された。それが何によるのかは言い当て難いが，理屈ではない何か感性に訴えるもののようである。遍路を歩くことから得られた私自身の体験を以下に述べる。これらの経験は私の生涯忘れ得ないものとなることは確かだ。

５月28・29日に行われた“さつき遍路”は，今治明徳短期大学の企画へのジョイントで，晴天の下，両大学延べ37名の学生職員が車椅子数台を押しての歩きであった。一日目は53番札所円明寺を出発し，52番太山寺，51番石手寺，50番繁多寺，49番浄土寺，48番西林寺，47番八坂寺，46番浄瑠璃寺と逆打ち（逆回り）27㎞の予定であった。しかし，西林寺を過ぎた杖の渕22㎞で時間切れとなった。私を含め初参加の者には適度な入門編であった。

翌日は，円明寺を出発し54番延命寺までの35㎞であった。目的地は遠くにかすむ高縄半島を回り込んだ今治市で途方もない距離に見えた。しかし，海岸や山間部の風景を楽しみながら完歩出来た。後半は

マメのできた足を引きずりながらである。

この歩きから多くのことを学んだ。先ずは身体で感じた距離感である。余裕を持って半日歩き続けた距離であり，JR特急で1時間の距離でもある。また，“遍路を歩いてみよう”という類の決意次第で誰にでも週末に実現できる距離でもあった。次に，当初，車椅子の存在は足手まといになるのではないかと内心思っていたが，全体のスピードを変えるものではなかったことは驚きであった。むしろ，疲れたら乗せてもらえる…ということや，車椅子を押す役がかえって楽ではないか，と思えたことも意外であった。ただ，車椅子の視点で，すぐ横を大型車に追い越されるのは恐怖ではあるが。両校の学生が同じ目的を持って自然と交流しながら歩き続けるのを見るのは良いものであった。いわゆる3Kを避ける現代の若者であるが目的に向かって努力をいとわない古今東西変わることのない姿があり，“歩き”の受け取り方も個性豊かであったように思う。途上のお接待は参加者全員にとって等しく安息のひとときであったことは言うまでもない。

8月20・21日に行われた“夏期遍路”実習は受講生2名を含む10名の参加で愛媛大学独自の企画であった。一日目は，JR卯之町駅集合，43番明石寺を訪れた後，宿泊地の内子町大瀬までの38㎞である。しかし五十崎に入った25㎞地点で時間切れとなりタクシーを利用した。“大瀬の館”で自炊宿泊した後，翌日は小雨の中，久万へ，落合を経由し44番大宝寺までの28㎞であった。当初はさらに10㎞先の45番岩屋寺を予定していたが到底無理であった。予約していたジャンボタクシーで帰途についた。

小雨は夏場の舗装道路歩きには慈雨である。山間部の遍路道は交通量も少なく，参加者は，山村の風景を思い思いに楽しんだのではないだろうか？　途中で飲んだ岩清水の冷たさと旨さに感動し，沿道の直売所で手に入れた新鮮なトマトの味も懐かしく人々とのふれあいの中に幸せを感じながら…。立場上，引率の責任を多少感じているものの自分自身が先ず楽しんでいたのである。

以上の様な野外実習では多くを語る必要はない。受講生は予め講義で学んだ“遍路”についての知識と，それ以上に，彼らのこれまでの体験や知識を基に，実体験の中で楽しみながら（あるいは苦しみながら）学べばよい。また同時に，感動や感想を参加者同士で共有することも大切である。それぞれ二日間に亘る“歩き”の中に，それらが自然な形で実現できていたと信じている。

曲がりなりにも遍路実習を終える事が出来たが，これには多くの方々の協力が必要であった。今治明徳短期大学，愛媛大学教育学生支援部，卒業生，一般社会人の方々からは企画・庶務・“歩き”参加・伴走車・お接待役…と，サポートを受けた。特に，さつき遍路では今治明徳短期大学市川ひろみ氏,“四国八十八ヶ所の札所をバリアフリーに”で活動されている大石正明氏にお世話になった。また，愛媛大学教員OB足立紀子氏からは，歩き遍路体験からのアドバイスと激励をいただいた。実際の歩きは，勿論，へんろみち保存協力会編の地図と首っ引きであった。

3．学生達のレポート

さつき遍路・農学部1回生SA生

① 授　　業

最初にこの授業をとったときは，遍路についてもあまり知らず，また歩くのも甘く見ていた。

まず，この授業のはじめに，正しい歩き方の授業を忠政啓文先生から受けた。今まで自分は歩くことに関して特に意識などしていなかった。しかし，競歩を長い間やっていた忠政先生の歩き方を見て，私たちとはぜんぜん違うと実感した。背筋も伸びているし，なによりとてもきれいだった。遍路のときにがんばって実践してみようと思った。

内田先生の授業では遍路の歴史や，持ち物，遍路の意味，遍路の作法，マナーなどを習った。

一口に遍路といっても，順打ち，逆打ち，一国まいりに区切り打ちなどさまざまな方法がある。またその回り方も，バスやタクシー，自家用車や電車を使ったりするのや，自転車，歩きなどがある。これらのことも授業ではじめて知った。

またお遍路さんの格好についても習った。菅笠に書かれている「同行二人」は，弘法大師と一緒だということを表し，金剛杖は弘法大師そのものであり，橋の上ではつかないことや，白衣，笈摺，鈴，頭陀袋，札ばさみなどにもそれぞれ意味があると知った。遍路にかかる費用や，お接待についても習った。

遍路のマナーについては，遍路は「修行」と考えて，道中ほかの人に迷惑をかけないことや，「十善

戒」や「三信条」を心がけることを習った。十善戒は「不殺生」「不偸盗」「不邪淫」「不妄語」「不綺語」「不悪口」「不両舌」「不慳貪」「不瞋恚」「不邪見」である。遍路の作法は，山門にて合掌し，一礼をする。次に手洗いで手を清める。その後本堂に参り，納め札，線香，ロウソク，お賽銭を納める。念珠をすり，合掌してお経を唱える。その後，大師堂に行き，本堂と同じ要領でお参りする。

これらはほとんどが知らないことばかりで，今まで愛媛で暮らしてきたのに遍路については何も知らなかったのだなぁとショックを受けた。

だから，さつき遍路では，もっと遍路をしるためにがんばって歩くぞと思った。

② 歩いてみて

さつき遍路一日目の朝，私は寝坊してしまい，急いで集合場所である本学の正門前に行った。何とかぎりぎり間に合って，タクシーで無事スタートの円明寺に着いた。このさつき遍路は私たち愛媛大学の学生だけでなく，今治明徳短大の学生と合同で行われた。今治明徳短大の学生はただ遍路を行うのではなく，バリアフリーの授業として，車椅子を使い，「車椅子の人でも遍路は行えるのか」についても調べていた。これを私たちも一緒に行うことになり，はじめはとても驚いた。また，朝早かったのに，境内にはすでに何人かの参拝客がいたのにも驚いた。

まずは円明寺から太山寺へと向かった。このときはまだまだ体力も気力もいっぱいで，楽しく歩くことができた。

太山寺に着き，バリアフリーの調査を行った。ここで，車椅子での移動がどんなに大変かということを知った。上り坂がつらいのはもちろん，下り坂は後ろ向きで進まなくてはならず，ひとりでは危険でとても下りられないし，たった5センチの隙間や段差さえもとてもきつい障害になる。またトイレは一応身障者用のトイレはあるが，幅や奥行きが足りず，意味を成していないものもあった。スロープがなく，車椅子ではいけない場所もあった。このように遍路を行おうとしても，現状では簡単ではないことがわかった。誰でも自由に遍路を行えるようになるといいと思う。

調査も終わり，参拝も済み，太山寺から次の石手寺を目指した。ここは10.3キロの長丁場で二日間を通して一番つらかったかもしれない。しかし，途中の護国神社で休憩してからは，なぜか少し楽になった気がした。佐伯先生にもらった塩マスが効いたのかもしれない。佐伯先生や内田先生はたくさんのことを知っていて二日間でいろいろなことを教わった。長時間の運動には水分も大事だが，それ以上に塩分が大事だということも教わった。その後も周りの人や先生と話しながら次の寺を目指した。

道中やお寺で，たくさんのお遍路さんを見た。それを見て，よし，私もがんばろうと思えた。また，遍路はたくさんの人に知られているのだと実感した。

二日目は一日目とは違い寺と寺に長い距離が開いている区間だった。疲れはたまっていたが，周りの景色を見ることもでき，一日目よりも楽に歩けたと思う。そして，最後に延命寺に着いたときの達成感はなんともいいがたいものがあった。

この遍路の授業を選んで本当によかったと思う。これからの人生でまたいつか遍路を歩いてみたいと思えた。

さつき遍路・農学部１回生 SB 生

私は入学当初シラバスを読み，軽い気持ちでこの「瀬戸内の文化」の授業を選択していた。いざ授業が始まってみると，さつき遍路のために競歩選手の忠政さん直々に歩き方のコツを教えていただいたり，実際に山を登ってみたりと思いの他ハードであった事に驚いた。しかしそれと同時に，物事をやり遂げた後の達成感や歩く事の楽しさを感じるようになっていた。

そしてついに５月28日さつき遍路初日。この日は緊張してよく眠る事が出来なかった。まず愛大に集合し，すげ笠を持って集合場所の円明寺へ－。ここで今治明徳短大の人達と合流し，挨拶をしてから出発した。今回は車椅子の人が遍路出来るか？というバリアフリー調査も含めていたため，とてもいい体験が出来るのではないかという期待や，車椅子を使う事によってより大変になるのではないかという不安とで複雑な心境だった。最初の目的地である太山寺に着くと，まず電動の車椅子を利用して生活している人の話を聞いてから班分けされ，太山寺で調査を行い，傾斜の角度・階段の段数・溝の幅などについて調べた。そして，私はここで生まれて初めて車椅子に乗った！　乗る事でさえ初めてなのに，車椅子を担がれて階段を上ったり下りたりしたのはとても怖かったが，この体験により車椅子を利用してい

る人の気持ちを理解出来たし，困っていたら手助けしたいと思うようになった。調査を終え，ここから車椅子に乗ったり明徳の人と話をしながら護国神社を目指したがとても遠かった。車椅子には乗るばかりでなく押したりもしたが案外難しいし，力がないと真っ直ぐに押せない事が分かった。また，正直もう車椅子はなくてもいいのではないかとも思い始めていた。護国神社で昼を済ませ，次に石手寺へ行った。ここで名物の焼きもちを食べながら繁多寺へ向かった。焼きもちは美味しかった。繁多寺では何と接待としてお婆さんからクッキーやパンをいただいた。これにより，このような接待があるという事に驚き，また感動した。そして私は車椅子を結構押していたので，自分で言うのもなんだが上手くなってきた。今回は残念な事に，時間の関係で目的地の浄瑠璃寺でなく西林寺までしか行く事が出来なかったのだが，約24㎞を歩く事が出来て嬉しかった。帰る頃には疲れきっていてクタクタだったので，明日歩ける自信が全くなかった。

さつき遍路二日目。今日は約40㎞歩かなくてはいけなかったので朝から不安だった。この日も円明寺で明徳の人と合流し，班長決めで私が班長になってしまったので余計不安になったが，出発してから班の人と話したり車椅子を押している人をカバーしたりと昨日は全くなかった協調性が生まれ少し気が楽になった。しかし，今日は歩いてばかりの日なのでさすがに北条まで歩いたら一人で歩く事が多くなっていた。海岸沿いの次は難関の山登りをして，女の方が軽いという事で私が車椅子に乗り男３人が引っ張ってくれた。上りがきついのはもちろんだが下りはさらに怖かった。急な坂を車椅子に乗り，しかも後ろ向きでスピードも出ていて…絶叫マシンに乗っているような感じだったが山の中はのどかで良かった。そしてここを過ぎると今治を目指し海沿いを歩いた。涼しかったが，次の目的地である遍照院は遠く，何度も挫折しそうになった。やっとの思いで遍照院に到着し，昼を食べていると記者の人がインタビューして回っていたので私は逃げていた。ここからさらに歩き進み星の浦公園へ行った。ここまでが一番きつかった。そこではあまりにも足が痛かったのでみんなが綺麗だと言っていた海を見る事が出来なかったのも心残りだ。ここからゴール地点である延命寺まで行っていると，まさに足が棒になるという感じだった。口数も明らかに減ってきていた。延命寺に着いた時には疲れ果てていたのだが，充実感や達成感の方が多かった。しかし，ここから明徳に行くと聞いたときはショックが大きかった…。何だかんだ言っても，終わってみるとやって良かったと思えたし，遍路を歩く事の大変さ，接待のありがたさ，車椅子で歩くには危険が多い事，色んな人と交流する事の楽しさなどなど多くの事を学べてとてもためになった。美味しい物もいっぱい食べれた！授業を選択して良かったと思った!!

さつき遍路・法文学部１回生 SU 生

①　歩いてみて

５月28日。朝。ついにさつき遍路をする日がきたんだと少し緊張しながら家を出ました。授業でウォーキングの練習をしましたが，ちゃんと実行できるのかな，全部歩ききれるのかそんなことを考えていたと思います。最初に大学の正門の前に集合して自分の菅笠をもらいました。そしてそのままバスに乗り込み円明寺まで行きました。そこで今治明徳短大の人たちと合流して太山寺へ行きました。さっそく，太山寺をめざして歩き出しました。最初はまだみんな元気に話をしながら歩いていました。でも，忠政さんに教えていただいたウォーキングが出来ていたかは正直あやしいです。そして太山寺につきました。太山寺では障害者の方のお話をきいてバリアフリーの勉強をかねて車椅子に順番に乗ったり，押したりして車椅子に乗った人たちの目線から歩くことの難しさを体験しました。話のなかで健常者にはちょっとの段差でも車椅子に乗っている者にはそうではないとおっしゃっていたことがよく分かりました。また太山寺のトイレでは車椅子用のトイレが設置されていましたが，実際にはそれは車椅子ではとても使いにくいものでした。身の回りには障害者の人のためにスロープや手すりが設置されているところもあるけど，ただ設置すればいいというわけではなくてそれが本当に使いやすいものか確かめていかなければいけないと思いました。太山寺は緑が多くてとても気持ちよかったです。そして太山寺をあとにして次は石手寺をめざして出発です。石手寺までの道のりは少ししんどかったです。でも途中で昼食をとってしばらく休憩をしたのでなんとか石手寺までたどりつくことができました。石手寺は太山寺とはまた雰囲気が違って豪華な感じでした。また石手寺はたくさん白衣をきてお参りしている人がいまし

た。少し話は変わってしまうかもしれないんですが，さつき遍路をすることになって町で白衣をきて巡礼をしている人を見ると無償に応援したくなりました。巡礼をしている人同士は全然知らない者同士なのに，同じ巡礼をしているというだけですごく身近な人に感じることがあると聞いたことがありましたが本当にそうだなと感じました。それから，さつき遍路をする前「四国88ロード」という映画がちょうどビデオで貸し出しになったので見ました。内容はたいしたことはないんですがお寺をキレイにとっていてお遍路をするうえで参考になりました。話はもどって，次に繁多寺に行きました。そこでおばあさんにパンを頂きました。ほんとうにお接待が行われていることとそういう人のやさしさに触れることができてとても感動しました。それから西林寺へ行って一日目は終わって行きました。最後にシュークリームを食べたんですがそのときのシュークリームがすっごくおいしかったことが忘れられません。それから，繁多寺か西林寺か忘れたんですが，バスツアーでお寺を回っている人たちに出会いました。ほとんどおじいちゃんおばあちゃんだったんですが，人々がお遍路に魅了されて実際に巡礼してみるお遍路の不思議な魅力を目の当たりにした気がしました。

翌日，５月29日。寝過ごしそうになって急いで準備をし家をでました。二日目も天気は良好で朝また大学の正門に集合しバスでまた円明寺まで行きました。そして円明寺につき今治明徳短大の人と合流して二日目もまた歩きだしました。二日目は一日目と違って寺と寺の距離が長く海沿いをずっと歩き続けなくてはいけなくてとてもしんどかったです。最後の方ではみんな口数が少なくなっていました。延命寺についたときは本当に疲れていたけど歩ききったという達成感が沸いてきました。私は実家に帰るときに海沿いを通ってバスで帰るんですが，バスの中からここも歩いたよなって景色を見ることがあります。そうすると，本当にがんばってよく歩いたなって思いながらさつき遍路をした日のことを懐かしく思います。さつき遍路は本当に自分にとってよい経験でした。こんなことはなかなか一人ではできないし，全然知らない人と出会い一緒に同じ目的地まで歩く苦しさ楽しさは言葉では説明しにくい感動がありました。なんとなく人々がお遍路に魅了されるのが分かった気がしました。

ただちょっと困ったことは，次の日の朝体中が筋肉痛でたいへんでした。

さつき遍路・理学部１回生 SU 生

１．はじめに

せっかくはるばる北海道から四国に来たということもあり，四国の文化ともいえる遍路の勉強を通し少しでも多くこの土地のことについて知ろうと思ったことと，実際に歩くということで，生の体験を出来ることに興味を強く持ったことを理由にこの授業をとることにした。

２．四国遍路とは

真言宗の開祖空海が42歳の厄年のおり，厄払いのためにかつて自分が修行した四国山中や海辺の修行地，寺など巡って祈願したことから始まった。

その後，空海の名声が高まるにつれて，空海を崇拝し，それにあやかろうとする修行僧，行者などが空海の修行法を見習い，その足跡をたどる旅をするようになりそれが次第に四国遍路に発展したといわれている。

３．遍路の装いについて

現代の巡礼・遍路の姿は，死者があの世を修行している姿を意味していると考えられ，菅笠は棺の蓋の象徴であり，白衣はいわゆる死装束で他界へ行く者であることを象徴する。ちなみに僕たちのさつき遍路の装いは菅笠のみだった。

４．正しい歩き方

今回のさつき遍路ではとにかくひたすら30キロ以上を歩くということで，競歩の選手である忠政啓文先生を講師に招いて正しい歩き方を学んだ。

そもそも「歩く」という運動は人間が一生の中で最も長く行う運動である。多くのスポーツの中での動作が,「歩く」という動作の延長線上にあり，言い換えれば「歩く」という基本動作をもっと意識し，気をつけてみることでパフォーマンスがあがるということになる。それだけ「歩く」という動作はかなり重要な動作といえる。

５．さつき遍路本番

一日目は自分の不注意により遅刻してしまったため，残念ながら参加することはできなかった。

二日目はしっかり寝坊もすることなく出席した。まずは愛大正門前に全員集合し，第50番札所円明寺へタクシーで向かった。そこで今回合同で歩くことになっている今治明徳短期大学生と初対面をした。

今回は明徳のほうが，車椅子の人がお遍路ができるかどうかの，バリアフリー調査をすることになっていたため各班に車椅子１台が渡され乗る人・押す人が時間を見て交替しながら歩き始めた。順調に海岸沿いを歩いていき途中で漁師が手に銛をもって，かなり大きな魚をとっていたのを見て驚いた。途中海岸沿いでお遍路さんならではといえるお接待をうけた。はちみつレモン・かんぱん・お茶などをいただき，涼しい日陰に座りながら疲れを癒した。エネルギーを補給して，再び出発。海岸沿いを抜けると，今度は険しい山登りへ突入。このお遍路一番の難所だった。道脇にはみかんがなっているのを見ることができ，生まれて初めて目の前で見ることができてうれしくもあり，改めて愛媛県にやってきたんだなぁという感じがした。上りももちろん大変だったが，下りもそれに劣らず大変だった。車椅子を支えながら下りたので余計に大変だった。車椅子の人だけでお遍路を歩くのは厳しいだろう。少なくても現段階では一人に対し最低二人以上はサポートが必要に思った。再び海岸沿いを歩き，遍照院でしばしの休憩をいれ，出発してまもなくまたもやお接待を受けた。今度はおいしいアイスクリームだった。再び果てしなく続く道をひたすら歩き続ける。会話も徐々に無くなってきた。途中砂浜のきれいな星の浦公園で休憩をとる。久しぶりに見る海は，青く透きとおっていてきれいだった。再び歩き，ついに今治の第54番札所延命寺に到着した。思ったよりも足も痛くもなく，疲れてもいなく，もう少し歩けるような気もした。草もちを最後にもらい記念撮影をして，帰りは電車を使って松山へ帰宅した。半日かけて一生懸命歩いてきた道のりをたったの１時間足らずで戻ってしまい，少しさびしい気持ちになった。

６．実際に歩いてみて

歩く前にあまりお遍路のことについて調べていなく，今レポートを書きながら歩く前からもっと事前準備をしておくべきだったように思う。そうすればより歩くことの意味を一つ一つかみ締めながら，歩くことが少しは楽になったかもしれない。そのことが非常に残念だった。歩いてみて強く感じたことは人の温かさである。お接待というものを無償で受け，地元の人の温かさをひしひしと感じることができた。このような行為が日常的に行われているということは，それだけ地域でお遍路さんが受け入れられている証拠だと思う。あと，お遍路を通しての出会いもたくさんあったことが何よりもうれしかったことである。とりわけこの授業の生徒数は10人もいなく少人数だったこともあり，わりとみんな仲良くなり，また，明徳の方の生徒ともかなり気の合う人と出会うことができた。これもお遍路ならではのことなのかもしれない。歩いた後の達成感も格別であり，また機会があれば死ぬまでにはぜひとも八十八ヶ所回りたいと思った。

さつき遍路・農学部１回生 SE 生

爽やかな朝となった５月28日，私たちはバスに乗り込んだ。行き先は円明寺で，そこで今回合同で遍路をする明徳短大の人達と合流した。明徳短大の先生に杖を使いたい人と聞かれて即座に志望してみたのはいいものの，杖が意外と重くてびっくりした。カンカンと木の独特な音を響かせながら，私たち一同は太山寺を目指した。

太山寺の長い坂は，上るのに苦労した。今治短大で遍路のバリアフリーについて調べているらしく，見ればいつの間にか車椅子まで用意されている。その後班で調査することになったが，なんと私の班には知り合いが誰一人おらず，しかも私ただ一人女であった。一人だけ恐ろしく気まずげに行動してたのは言うまでも無い。

車椅子に人を乗せ，もしくは自分が車椅子に乗って実際の身体障害者やそれを支える人の不便さを味わうために用意された車椅子は，思ったよりずっとコントロールが難しい。階段では３人４人がかりで持ち上げなくてはならず，坂では半回転して逆さまに降ろさなければならない。乗っている者もそうだが，押している者もかなりハラハラであった。そういう私は乗せられて坂を越えたとき，本当に口から心臓が飛び出て死ぬかと思った。まさに死を覚悟した瞬間であった。

山頭火一草庵に寄って護国神社でお昼をとったあと，私たちは石手寺を目指した。空は憎たらしいほど快晴であり，あまりの暑さにうんざりした。石手寺は太山寺と同じように広く，とても静寂な雰囲気であった。私たちは女子３人で縁側に座り込んだ。石手寺に着いたら衛門三郎が握っていた石を是非とも見ようと心に誓っていたのだが，それすら忘れるほど疲れていた。繁多寺は今までの寺と比べて比較的道路に面していなく，人家や畑の横の道をかいくぐってたどり着いた。なぜか寺の側でアイスを売っ

ているおじさんが佐伯先生と顔見知りのようで，先生が美味しいと絶賛するアイスを奢ってもらった。後味がしつこくなくさっぱりとした不思議なアイスだった。機会があればまた食べたいと思った。

浄土寺を通った後,西林寺に向かった。国道に沿ってずっと進んでいたわけだが，はっきり言ってここはあまり記憶にない。なぜなら私は西林寺よりも，その近くの名水があるという杖ヶ淵公園の方に意識が飛んでいたからだ。おいしい水が飲めると聞いて走って先頭にたった私は，案の定迷子になってしまった。ちょっと恥ずかしかった。着いてみるととてもいい雰囲気の公園で，水のところにはけっこうな人が並んでいた。時間の関係でその後に予定されていた八坂寺と浄瑠璃寺は行けなくなったのでここから帰るのだそうだ。差し入れとしていただいたシュークリームはとてもおいしかった。もちろん水もおいしかった。

二日目の29日，再び出発場所となった円明寺を出てしばらく，私たちは海沿いをずっと歩いていた。休憩場所で腰に大きな魚をぶら下げているおじさんを見たり，藤が立派に咲いている家のところで内田先生の奥さんから乾パンと蜂蜜レモンを頂いたりと楽しく歩いていた。そこまではよかったが，その後は行っても行ってもなかなか休憩に入らない。大きな鬼瓦が飾られているお寺で昼食をとったあと，再び苦行は延々と続いたのである。日がかんかん照りとなって降り注ぎ，ただでさえ長いアスファルトの道のりが余計長くなった気がしてならなかった。海のそばにある公園で休んだときなど，私の足はすでに痛いのを通り越して熱かった。よく考えてみれば一日目と二日目では距離が倍近くもあるのだ。疲れも限界に達し，今治短大の近くの寺（たぶん延命寺だと思うが）についた頃には，もう本気で一歩も歩けないと思った。

今回のお遍路には講義に関わる私たち以外にも何人かの参加者がいて少しだけ緊張したし，終わった後はしばらく筋肉痛に悩まされたが，やはりとても楽しかった。また,いろんなお接待を受けて食べて，その美味しさに驚いたものだった。さすがに夏には行きたくないが（５月でさえそんなに暑かったんだから夏に行ったら絶対死んでしまう…），また機会があれば行きたいと思う。

最後に，お遍路には定番である菅笠に書かれている言葉の意味を考えた。

迷故三界城　（城とは城壁に囲まれているものであるため，廻る事ができても出る事ができない事を指す。つまり「迷っているが故に前世，現世，来世の中から出られない」）

悟故十方空　（空は“そら”と読むこともできるが，同時に“空っぽ”，“何もない”と捉える事もできる。十方は周囲の事であるから，「悟ってしまえば妨げるものは全て無くなる」とも考えられる）

本来無東西　（「本来東西が無いのだから」）

何処有南北　（「何処に南北があろうか」）迷いを捨てれば何もかも自由になり，全ての事が見えてくるという意味なのだろうか。私にはそう言っている気がしてならなかった。

さつき遍路・農学部１回生 NI 生

最初は実際に遍路を歩く前に，遍路についての詳しいことを授業で学びました。

まず，巡礼の服装については，菅笠，白衣，笈摺，金剛杖，鈴，札ばさみ，頭陀袋が基本装備で，意味は，菅笠と白衣は，いわゆる死装束で，巡礼が他界を行くものであるということを象徴しています。笈摺は，最後の札所に奉納することで俗世への復帰を表すというものです。金剛杖は，巡礼において弘法大師そのもので，宿に着くと先を足のように洗って床の間に置き尊像として礼拝します。また，巡礼の途中で死亡した際にはそのまま墓標にもなります。死出の旅路の身支度のひとつとして死者の棺に入れることもあります。鈴は，腰につける五鈷鈴で，持鈴ともいい，その音は浄土の天音楽の模写とされ，魔を避けるためのものだが，獣から身を守るという意味もあります。札ばさみは，納札いれともいい，納札を持ち歩くときに首からさげて用います。頭陀袋は，修行者が欲望にとらわれず精進することを頭陀といい，托鉢するときに首からかける袋を頭陀袋といった。巡礼も修行のひとつということから頭陀袋を用いる。

次に，遍路の形態だが，霊場を巡礼することを，独特の用語で打つと表現します。八十八ヶ所を１回の旅で回ることを通し打ちといい，だいたい40～50日かかります。だから数回に分けて回る区切りうちや，県ごとに分けて回る一国回りの人も多い。ほかにも八十八ヶ所を逆に回る逆打ちというものもあります。

そして，ある程度遍路のマナーや歩き方の講習を

受けた後に遍路に出発しました。

一日目

朝早くに愛媛大学前に集合し，今治明徳短大の人達と円明寺で合流しました。そこで諸注意をうけて，金剛杖をお借りして太山寺に向けて出発しました。太山寺では，まず車椅子の人が遍路をする場合にどのような問題があるか，などのレクチャーを受けてそれから４人一組の班に分かれ太山寺の駐車場，トイレ，本堂，納経所，参道などのバリアフリーについて調べました。こういったことをするとは聞いてなかったのだが，これが今回の今治明徳短大の目的であったらしいので少し面倒とは思いましたが，やってみると意外と楽しかったです。移動の際には班のメンバーの一人が車椅子に乗って一人が押すという方式で移動しました。乗っているときも緊張しましたが，押しているときのほうが車椅子は少しの坂でもすぐに影響を受けてしまうのでそれ以上に緊張しました。次に昼食のために護国神社に向かったのですが，いろいろと遅れてしまい護国神社に到着して昼食になったのは２時を過ぎたあたりでした。そこで30分ほど休憩したあと，次の目的地，石手寺に向かいました。石手寺の名前の由来は，昔，伊予国に衛門三郎という豪族がおり，家は富み栄えていた。しかしこの三郎は強欲な男で，私利を謀ることのみを考え，神仏を信じない男であった。ある日三郎の家に貧僧が托鉢に訪れたとき何も与えないどころか悪口を言い，鉢を叩き割って追い払った。ところがその翌日から三郎の子が一人また一人となくなりついに８人いたすべての子が亡くなった。さすがの三郎も前非を悔いて深く嘆き悲しみそれまでに蓄えた私財をすべて寺社に寄進したり貧民に施したりして，自らは一笠一枚のみを持って旅にでて四国霊場を二十一度も廻ったそうです。阿波国境山寺に至ったとき倒れてしまった。そこに弘法大師が現れ，三郎の罪は消えたことを告げ衛門三郎と刻んだ石を与え手に握らせた。そのとき三郎は次に生まれるときは河野氏の子として生まれたいという願いを述べて亡くなった。その後河野家に一人の男児が生まれたが，左手を固く閉じ開くことがなく安養寺で祈禱してもらったところ手を開き，その中に衛門三郎と刻まれた石が出てきたそのことにより，安養寺は石手寺と呼ばれるようになったということだそうです。石手寺では石畳の段差を調べたりしました。私はそこで納経帳を購入しました。次に繁多寺に向かいました。繁多寺は入り口から本道までが砂利道で車椅子がなかなか進みませんでした。そこでパンの接待を受けました。次に向かったのは浄土寺です。その次に向かったのは西林寺です。本当は次の浄瑠璃寺まで行く予定だったが，時間の都合で近くの公園でお接待を受けて解散しました。

二日目

この日も同じように円明寺に集合し出発しました。この日札所は最後の延命寺だけだったのでひたすら歩くのみでした。なので，道中の接待のありがたさが非常によくわかりました。

実際に二日間かけてお遍路をしてみて，非常に疲れたけれど，何百年も昔からお遍路をする人が絶えないわけがわかったような気がします。今後も，暇を見つけては今回購入した納経帳を完成させたいと思います。この授業を受けてお遍路を体験できたことは今までやりたくてもできなかったお遍路を始めるきっかけとなったので非常によかったです。

夏期遍路・医学部医学科１回生 KA 生

初日の行程の予定は，JR うのまち駅をスタートし，43番札所明石寺に到着。そこから札掛大師堂を目指しへんろ道を歩き，険しい山道や峠を越えて札掛大師堂に着いたら，そのまま大洲市を通り内子町に入り，大瀬の館という宿で宿泊するはずだった。

しかし現実はあまりにも厳しいもので，一日かけて歩いて行けたのは，ギリギリ内子町に入ったところまでで，そこから宿までは13キロ近くあり，タクシーの力を借らざるをえなかった。

初日歩いて一番思ったことは，お遍路を完全になめていた，ということだった。

まず，リュックに着替えやタオル一式を詰めて歩いていたことが甘かった。明石寺に行って帰るのに山道を往復しただけで，荷物の重さに肩や腰に違和感を覚え，昼前には痛さに耐えかねて，同行していた井上さんの車に余分な荷物を置かせてもらった。スタート地点で他の先輩たちが車に荷物を乗せていた意味が，ここまでで身にしみてわかった。

そして，次に身をもって学んだのは，目的地への見通しの甘さだった。計画表を見ると，ただ，どこからどこまでの距離がざっと書いてあり，読むだけでは大したことないように思えたのだが，いざ歩いてみると，目の前には山。特に昼食を食べた喫茶店から後は，山だらけだった。

多少の山道は覚悟していたものの，一日で２個も３個も山や峠を越えるとは，少しも頭にはなく，全くの想定の範囲外。短パンを穿いていった僕は，これはあきらめろと自分に言い聞かせて，草が茂る道の中，足を切られながら歩いていき，蚊に刺されたら，佐伯先生の薬草をぬり，ただひたすらに足を進めることに集中した。

最初は会話に入っていったが，昼過ぎの山越えあたりから，それも途切れがちになり，「すごいね」などと一言しか僕は返さないようになっていった。その点，同行した先輩たちは延々としゃべり続けていて，怪物ぶりをいかんなく発揮していた。

山越えを終え，大洲市街に向かおうとする頃から，だんだん先頭と最後尾の差が広がってきたので，ここは遅れまいと先頭をひた歩く佐伯先生の姿を追って，気を入れて歩を進めた。そうしているうちに，体が疲れになれてきたようで，足がどんどん前に進んでくるようになった。おかげで最後は，佐伯先生と先頭を歩くようになって，このまま大瀬の館にも着けるのじゃないかと思った。が，内子に入る寸前のところで，日も暮れたため，一日目は終了となり，後はタクシーとなった。

ここで驚いたのが，そこからタクシーで走る距離が長かったこと。まだこんなに歩く予定だったのか，と思うほど走り，僕は遍路合宿の厳しさの前に完敗した。

二日目の行程は，大瀬の館を出発して，小田に入り，三島神社を通り大宝寺に行くルートを取った。計画では大宝寺の次に岩屋寺に行く予定だったのだが，初日に計画通り到着できなかったことと，全員に疲れが残っていたことから大宝寺をゴールとすることになった。

二日目は朝から足が進まず，楽しんで歩くというよりも，競技に近いものに感じてくるようになった。何より大変だったのは，朝から雨が降っていたことで，カッパを着ていても，スタートしたらすぐに服が濡れはじめて，しばらくするとビショビショになってしまった。出発してすぐに峠越えが待っているのに加えて，服の重さもあったため，いきなり体力を削られる羽目にあってしまった。そのせいもあって，この日は歩く人それぞれが自分のペースを守って歩くようになり，先頭と最後尾の差もかなり広がるようになった。

なにより，この日すごかったのは，法文学部のTUさんとIIさんの二人だ。二人は出発から先頭を歩き続け，みんながしゃべる気力を無くしていく中，一日中話し続けたのだ。挙げ句の果てには，歩くのに飽きたと言って，走り始めて，僕は後ろで見ながら，この二人には勝てないと確信した。

初日と同じく，山を越えることが多かったのだが，初日と違ったのはいたるところに山の湧き水があり，水分補給ができたことだった。集落を見つけるたびに，そこには湧き水があったため，そこに住んでいる人たちは湧き水に支えられて生活していることがよくわかった。

昼をすぎて，久万高原町に入るあたりから，僕も先頭集団に加わって，そこからTUさんIIさんの３人で先頭を歩くようになった。しかし，久万に入ってしばらくすると，いよいよ足が動かなくなってきて，腿やらふくらはぎやら，いたるところに痛みを覚えた。

やっとの思いで峠越えを終えると，町並みが見えてくるようになり，そこから大宝寺まではすぐだった。大宝寺に着くと，とうとう足に限界が来てしまって，文字通り足が棒になったようだった。しかし，これまでの道程を考えると，何ともいえない達成感を覚え，とても清々しい気分だった。こういう苦労をしながら八十八ヶ所のお寺を巡ったら，悟りも開けるような気がした。

最後に，KOくん，TUさん，IIさん，MUさん，KOBさん，TAさん，車を出してもらったINさん，そして内田先生，佐伯先生。大変貴重な経験をさせてもらって感謝しています。ひとりではへんろ道を歩くことはなかったと思います。この旅をきっかけに，今度はひとりで近くの寺を回ってみようと思っています。ありがとうございました。

夏期遍路・医学部医学科１回生KO生

この講義に参加したことでまず得たものといえば，城北キャンパス周辺に風情のあるものがあんなにたくさんあることを知ったことだ。山頭火の一草庵，万葉苑，護国神社，そしてなんといってもあの裏山である。城山より少し高いぐらいの高さでちょっと登るにはちょうどよいし，お堂や石像，いろいろな植物，佐伯先生の話ではもっと面白いものがたくさんあるそうだが，興味深いものがいろいろあった。受験のせいですっかり精気を失った体には，山の空気，自然がとても新鮮だった。物知りな

先生達の話を聞きながら自然とあんなにふれあえる講義は他にはないだろう。

さて合宿に関してだが，一日目は比較的楽に歩けた。それは明石寺にむかう山道や途中で峠越えをした遍路道など土の地面が多かったからだ。土の地面というのはほどよいクッション性を持っていて，余計なことを考えなくても意外ときちんと歩けた。それに比べアスファルトの道路というのは歩くには本当に厄介だった。特に下りはどうやって歩いても足に衝撃が来て，上体がふらついて，体力の消耗が大きかった。

アスファルトの道路にこんなに違和感を覚えたのは生まれて初めてだ。日本中どこに行ってもアスファルトの道路，久万高原を歩いていて「よくこんなとこまで道路造ったな」と思ったが，本当に今や車中心社会で歩くことを前提には社会が構成されていないと感じた。つまりは人間にとって自然な動作である二足歩行をしなくなってきているということで，この不自然さに違和感を覚えたのだ。

科学技術が発展するにつれ，我々はますます自然から疎遠になっている。自然から疎遠になると歩かない，子供の頃に外で遊ばないなどして，体がだんだんと弱ってくる。昔は体が丈夫なのは日本人，弱いのは欧米人といわれていたようだが，それが最近逆転してきているらしい。久万高原に向かう途中に道を尋ねたお爺さんが「昔の若い者はここから大宝寺をまわってその日のうちに道後まで行っておった」と言われたのを聞いて，昔の人の強健ぶりを思いしらされた。それが今や愛媛県に関しては，田舎で買い物などどこに行くにも車を利用せざるを得ず，歩くことが少ないために成人病になる人が多いのだそうだ。世間は医療費の削減と騒いでいるが，まず病気になりにくい体を獲得し病気を予防することから始めるべきだと思う。そのために人間にとって最も自然な動作，歩くということから見直すのも手かもしれない。

合宿二日目は残念ながら20㎞ほど歩いた地点でリタイアしてしまった。

今回途中でリタイアした大きな原因の一つは肉刺で，それをかばいながら歩いたために腿やふくらはぎの筋肉までやられてしまった。なぜこんなに肉刺ができたのか，それはソックスが濡れて足が常にふやけた状態であった上に足とソックスと靴の相性が悪かったからだ。途中で出会った遍路のご夫妻によると，ソックスと靴の相性は重要なので，ソックスを何枚も持っておいてその中でよいと思うものを履くのだそうだ。足がふやけるのを防ぐためにソックスやタオルを何枚も持っておき，もっと履き慣らした靴を履いて行くべきだったと思う。

リタイアしたもう一つの大きな原因は，気力，精神力だ。一日に30～40㎞も歩くとなると一見体力勝負のようであるが，体力よりも気力に因るところが大きい。実際に合宿二日目などは寝転んでしまいそうな体を足ではなく精神が支えていたようなものだった。それが真弓トンネルから４㎞を歩いている間に，前も後ろもメンバーが見えなくなり「俺はこんな山奥で一人何をしているのだろう？」という気持ちになってとうとう気力が尽き，ついにはリタイアしてしまった。八十八ヶ所すべてを歩き通すにはそうとうの気力が必要だ。それをやりとげる人には，霊魂の供養などそれなりのしっかりとした思いがあり，その思いこそが八十八ヶ所すべてを歩ききる気力を生み出すのだということを実感した。

今回この講義に参加して，本当にお遍路がしっかりと四国に定着しているなと感じた。行く先々で沿道の人々が「ご苦労さん」などと声をかけてくれたし，途中で出会ったお遍路のご夫妻は実際にお接待でもらった卵を見せてくださった。また遍路道を示す標識が何箇所もちゃんと掲げられて，遍路道がしっかりと保存されていることには敬服したし，なかでも獣道のような遍路みちが保存されているのには驚いた。多くの人がお遍路さんを助けたり，また遍路を保存したりすることに尽力しているのだ。

このように講義を含めほんの数日のことではあったが，実際に歩いてみなければ得られないものがたくさん得られた。また歩く機会があれば今回の反省を生かして再挑戦し，今度こそ歩ききりたい。

おわりに

この授業の到達目標は,⑴講義と体験を通じて「お遍路さん」を知る，⑵歩くことの意味を体感する，⑶世界の「巡礼」に対する関心を深める，と設定した。佐伯氏のまとめと受講生たちのレポートにあるように，⑴と⑵は達成できたと考えているが，⑶については，もう少し世界の巡礼の講義を増やす必要があるようだ。